

1章 高齢者のソーシャル・サポート・ネットワークにおける シニアネットの可能性と課題 — 仙台市のシニアネットに関する調査研究を通して —

和気康太・茨木尚子

1. はじめに

わが国の 65 歳以上の高齢者は、2025 年に全人口の 25%を越えると予測されている。こうした超高齢社会の到来は、経済的には高齢者を巡る膨大な市場（シルバーマーケット）を生み出すが、それと同時に、社会的には国民の約 4 人に 1 人を占める高齢者ひとり一人の生活の質（QOL）、特に高齢者全体の圧倒的多数を形成する健康な高齢者（とりわけ前期高齢者）のそれをどうするかという課題をわれわれに問いかけることになる。

一方、近年の「IT 革命」と称される情報化の進展には目覚ましいものがある。インターネット、電子メール、情報端末機（PDA）、携帯電話（i モード）など、これまでにない新しいメディアの登場と急速な普及は、対人的なコミュニケーションの手段を単に多様化させるだけでなく、これからの本格的なブロードバンド時代の到来とも相俟って、日本社会の構造そのものをさらに大きく変えていくといわれている。

これまで、高齢者と情報社会は、たとえば「デジタルディバイド」の議論（高齢者はパソコンを使いこなすことができないので情報弱者になる、など）からも理解できるように、ややもすると無縁なものとして考えられてきた。しかしながら、近年のソフトウェアの飛躍的進歩によって、パソコンは高齢者や障害者なども含む、すべての人々が使いこなせる身近な「道具」（ツール）になってきている。21 世紀の日本において「高齢化」と「情報化」という 2 つの大きな社会的潮流は、相互に無視できない、いわば密接不可分なものとして積極的に考えていかなければならない時代が来ているのである。

そこで、われわれは、明治学院大学・社会学部附属研究所の特別推進研究プロジェクト「現代社会における技術と人間」の一環として「ソーシャル・サポートにおける CMC（computer-mediated communication）」と題する研究（以下、本研究と記す）において、こうした社会状況と将来予測にもとづき、さまざまな領域（社会心理学、社会学、老年学、社会福祉学など）の研究者が横断的な研究チームを組織し、学際的（inter-disciplinary）かつ実証的に研究を進めてきた。

われわれの研究テーマの論点は多岐にわたるが、そのなかから、本論では特に「シニアネット」⁽¹⁾と呼ばれる高齢者の新しい組織に注目し、その会員である高齢者のソーシャル・サポート・ネットワーク（social support network）において、新しいメディア、特にパソコン（personal computer）やインターネットがどのような機能を果たしているのか（あるいは果たすことができるのか）をあきらかにすることを目的として調査研究を行った。

具体的には、地方自治体の情報化政策の面で先進的な都市である仙台市において活動を展開している「仙台シニアネットクラブ」⁽²⁾と「シニアのための市民ネットワーク仙台」⁽³⁾という 2 つの組織の特性を分析し、その上でそれらの組織の活動へ参加している高齢者（以下、会員）を対象として「質問紙調査」を実施した。また、その調査結果を比較分

析するために、2001 年度に仙台市が行った「IT 講習会」を受講した高齢者（以下、受講者）に対しても、同様の質問紙調査を実施した。さらに、時系列的な変化を把握するために、「パネル調査」の手法を用いて、6 カ月後に同一の調査対象者（会員と受講者）に対して、質問紙調査を実施した。

以下、本論では上記の「質問紙調査」の概要や結果などについて記述した上で、そのなかから、本研究に関連する 3 つのテーマを取り上げ、その調査結果について分析と考察を行うことにしたい。なお、本研究では、他にも質問紙調査を補足する目的で、上記のシニアネットの会員などに対して、質的な面接調査（インタビュー）も行っている。

2. 研究方法

本研究では、関連領域の先行研究⁽⁴⁾の検討などにもとづき、われわれの研究組織が新しく「質問紙」を作成して現地調査を行った。その概要は、次の通りである。

(1) 調査研究の対象と方法

本調査研究の対象は、上述のように「仙台シニアネットクラブ」（以下、シニアネットクラブ）と「シニアのための市民ネットワーク仙台」（以下、シニアネット仙台）の 2 つの組織およびそれらの会員である。

表 1—1 は、それぞれのシニアネットの特徴を示したものである。時期的にはシニアネット仙台の方が先に組織されたが、その活動は特定非営利活動法人（NPO 法人）として、高齢者の生きがい作りや社会参加の促進、あるいはデイケアや食事サービスの提供など、かなり幅広くなっており、高齢者のパソコン教室（PC サロン）も、そうした活動のひとつとして行われている。一方、シニアネットクラブは、シニアネット仙台よりもあとで組織されたものの、高齢者のパソコン教室に力点を置くなど、ネットワークに特化した活動を展開している点が、シニアネット仙台とは異なっている。

本調査研究で実施した「質問紙調査」（2001 年 10 月実施：以下、第 1 回調査）では、この 2 つのシニアネットの活動に参加している会員、すなわちシニアネットクラブが 86 名、シニアネット仙台が 35 名で合計 121 名を対象とした。また、質問紙は、それぞれの事務局が会員（シニアネット仙台は PC サロンのみ）に配布し、回収は 2 週間以内に限定して郵送法で行った。

IT 講習会の受講者に対する質問紙調査では、2001 年 10 月から 2002 年 3 月にかけて実施された講習会（45 回）の参加者 900 名を対象とし、そのうち 580 名（64.4%）から回答が得られた。なお、仙台市の IT 講習会は、20 名を単位として実施されているが、今回は「シニアネットクラブ」が実施主体となっている講習会の受講者のみを対象として調査を実施した。また、質問紙は、それぞれの IT 講習会が終了した時点で受講者に配布し、回収はやはり 2 週間以内に限定して郵送法で行った。

さらに、調査対象者の時系列的な変化を把握するために、「パネル調査」の手法を用いて、同一の調査対象者（会員と受講者）に対して、6 カ月後にほぼ同一の質問紙を用いて「質問紙調査」（2002 年 4 月実施：以下、第 2 回調査）を行った。その結果、「シニアネットクラブ」では第 1 回目の回答者 86 名中、67 名（77.9%）が回答し、「シニアネッ

(表1—1) シニアネットの組織的特徴

	仙台シニアネットクラブ	シニアのための市民ネットワーク仙台
設立経緯	仙台市民を対象として1998年3月から開始した「60歳から楽しむインターネット教室」の修了者を中心にして発足した。	1995年1月に開始された河北新報の連載企画「夕日は沈まない・豊齢社会の構築」のキャンペーンを受けて、仙台市の学識経験者、ボランティア、地域コミュニティのリーダーらで組織された米国高齢社会調査団がアメリカの高齢者の現状を視察し、同年5月に国際シンポジウム「築こう豊齢社会・杜の都の挑戦」を開催したことを契機として同年8月に設立された。
活動目的	①高齢者がインターネットなどに 親しみ、情報弱者にならないための相互研鑽と交流 ②パソコンの操作に習熟した高齢者の技術を積極的に活用したボランティア活動	①高齢者の生きがいづくり ②高齢者の社会参加 ③世代間のたすけあい ④行政・企業とのパートナーシップによる新しい社会システムの構築 ⑤世界市民との連携
活動内容	①会員のパソコン・スキルアップのための研修 ②会員以外の人たちへのパソコン研修（IT講習会や小学生に講師を派遣） ③オンライン七夕祭りなどの組織との連携活動 ④オフライン・ミーティング	①国際交流（特にアメリカのシニア ネットとの交流） ②福祉・病院ボランティア ③痴呆性高齢者のデイケア（ケア・ポート ひだまり） ④高齢者向け食事サービス（ぼけっとはうす） ⑤会員や外部の人を対象としたパソコン教室（PCサロン）
会員数	約80名。高齢者のみで、男性の会員が多い。	約400名。組織としては、年齢を問わない。女性の参加者が多い。 なお、PCサロン参加者は約35名。PCサロンの参加者は男性が多い。
財 源	仙台市の健康福祉局や生涯学習局からの支援、郵便局からの委託費、企業からの寄付金、など	会員の会費、事業収益金、寄付金、助成金、など
利用しているメディア	電子メール、メーリングリスト、掲示板、ホームページ	電子メール、メーリングリスト、掲示板、ホームページ
その他		特定非営利法人（NPO法人）

(出典) シニアネットのホームページ及び関連資料より作成

ト仙台」では 35 名中、21 名（60.0%）が回答した。また、IT 講習会の参加者は、580 名中、348 名（60.0%）が回答した。（括弧内はいずれも有効回答率）ただし、今回は 60 歳以上に対象を限定したので、有効票のすべてを用いて分析していない。⁽⁵⁾

(2) 調査項目と分析方法

質問紙調査の調査項目は、(1) 基本属性、(2) 新しいメディアの利用状況、(3) 新しいメディア（特にインターネット）に関する意識、(4) ソーシャル・サポートの状況の 4 つに大別できる。

(1) 基本属性では、性別、年齢、世帯構成、仕事、職歴、収入源、暮らし向き、学歴、居住年数、健康状態、地域組織への参加状況などについて質問し、(2) 新しいメディアの利用状況では、パソコン、インターネット、電子メールの利用能力や頻度、情報機器の所有の有無などについて、また (3) 新しいメディアに関する意識では、インターネットに対する代表的な意見に関してどのように考えるかについて質問した。(4) ソーシャル・サポートの状況については、サポートの種類、頻度、相手について「提供」と「受領」に分けて尋ね、さらにそうした支援について現実（リアル）のサポートと、ネットワーク上（ヴァーチャル）のサポートに分類して尋ねた。なお、(5) その他として、高齢者の心理的な側面を測定するための「尺度」（scale）も、調査項目として質問紙に組み込んでいる。なお、第 1 回調査及び第 2 回調査の質問紙は、別添の資料の通りである。

分析方法としては、「シニアネットクラブ」、「シニアネット仙台」、「IT 講習会受講者」の 3 つのグループが、それぞれパソコンやインターネットの利用状況などの点で異なる特性をもつことから、調査項目ごとに分類してデータ分析を行った。ただし、本論の分析では、「シニアネットクラブ」と「シニアネット仙台」の会員は、日常的にパソコンを利用していると考えて、同一のグループとして分析を行っている。

3. 研究結果

(1) 基本属性

基本属性に関しては、既述のような項目を質問した。

以下、「会員」の主な結果を記すと、性別は「男性」が約 8 割、「女性」が約 2 割で、年齢は「前期高齢者」といわれる 60 歳代から 70 歳代前半の人が多くなっている。また、世帯構成は「夫婦だけの世帯」が約 6 割を占めている。仕事では約 7 割が完全に引退し、約 3 割は仕事（常勤・非常勤）をしている。職歴は「経営者・管理職」、「専門・技術職」、「事務職」が多く、収入源としては「公的年金」が 9 割以上で圧倒的に高くなっている。全般的な暮らし向きについては、約半数が「かなりゆとりがある」と「多少はゆとりがある」と回答している。学歴は全体の 3 人に 1 人が「大学・大学院」を卒業している。居住年数は平均値が約 30 年で、長期間にわたって仙台市に住んでいる人が多い。主観的な健康状態については、「（あまり）健康ではない」と回答したのは全体の約 1 割で、残りの 9 割は「健康である」、「普通である」と回答している。

また、地域組織への参加状況は、「町内会・自治会」38.1%、「婦人会」6.1%、「老人クラブ」10.9%、「社会福祉・ボランティア団体」76.9%、「市民運動・住民運動団体」

11.6%、「趣味等のサークル」66.1%、「健康・スポーツサークル」39.2%、「その他」40.0%（いずれも「積極的に活動している」の回答率）となっている。この回答結果から、シニアネットの高齢者は、伝統的な地縁型の組織（町内会・自治会、婦人会、老人クラブなど）よりも、むしろ社会福祉・ボランティア団体や趣味等のサークルなどの「機縁型」の組織で活動する意識・態度で、組織に参加していることが分かる。

なお、受講者の結果を「会員」のそれと比較すると、性別で男性が7割、女性が3割で、男性の割合が約1割低く、年齢では平均値で約3歳高くなっている。また、仕事では「仕事をしている」人の割合が1割程度低く、職歴では「経営者・管理職」の割合が2割程度低く、その分「専業主婦」が高くなっている。それ以外の項目では大きな差が見られず、総体的にはほぼ同質の傾向をもつ集団であると思われる。

上述の点から、今回の調査対象となった高齢者（会員・受講者）は、次の6つの特徴をもつ集団であることが分かる。①同世代の性別で比較すると男性の割合が非常に高い、②65歳から74歳までの前期高齢者が多い、③比較的長く現在の居住地に住む夫婦のみの世帯が多い、④学歴が高く、経営者・管理職・事務職などの仕事をしていた者が多い、⑤年金生活者が大多数であるが、経済的に苦しさを感じている者は少ない、⑥地縁型の組織ではなく、「機縁型」の組織への参加と親和性をもつ者が多い。

(2) パソコン・インターネットの利用能力と利用状況

パソコン・インターネットの利用能力に関しては、表1—2—1のような「尺度」を作成して測定した。この尺度は、既存のものをわれわれがあらたに編集し直したものであるが、1「パソコンの電源を入れて、起動させる」から14「デジタルカメラなどで撮った写真をパソコンに取り込む」までがパソコンの利用能力、また15「電子メールの送信と受信をする」から22「インターネット上で、ゲームやオンライン・ショッピングをする」までがインターネットの利用能力に関するもので、それぞれ難易度別に構成されている。

表1—2—1からもわかるように、〔A〕IT講習会受講者は、その大半がパソコンをこれまで利用したことがない高齢者であるため、4日間の講習会終了後の質問紙調査では1から8までの基本的な利用能力については回答率が高いものの、それ以外の範疇については15「電子メールの送信と受信をする」（38.1%）と17「インターネットを使って、ホームページを見る」（34.5%）を除いて、いずれもかなり回答率が低くなっている。

一方、〔B〕シニアネット会員は、6「キーボードを見ないで、速く打てる」、18「インターネットのホームページを自分で作成し、更新する」、19「インターネットの電子掲示板・チャットなどに書き込む」の3つを除くと、いずれも受講者に比べて、回答率がかなり高くなっている。なお、パソコンとインターネットの利用状況に関しては、会員は、6割から7割が「毎日、利用している」のに対して、受講者はその比率が5%未満で、大きな差がついている。

次に表1—2—2をもとに、第2回調査（パネル調査）の結果をみると、まず〔A〕IT講習会受講者については、いくつかを除いて、ほとんどすべての範疇（カテゴリー）で回答率が高くなっている。特に、5「キーボードを見ながら、ある程度、速く打てる」、11「パソコン用のソフトウェア（ワードなど）をインストールする」、12「周辺機器（プリンターなど）を追加したり、設定しなおす」、13「パソコンで、年賀状などのハガキやカ

(表 1—2—1) パソコン・インターネットの利用能力 (第 1 回調査)

(%)

パソコン・インターネットの利用能力	[A]	[B]	[C]
1. パソコンの電源を入れて、起動させる。	95.6	98.8	96.2
2. すべての操作を終了し、電源を切る。	88.8	97.5	90.5
3. マウスを使って、正確にクリックできる。	82.3	100.0	85.7
4. ゆっくりならば、キーボードを打てる。	78.8	50.0	73.3
5. キーボードを見ながら、ある程度、速く打てる。	27.1	80.0	37.2
6. キーボードを見ないで、速く打てる。	0.9	11.3	2.9
7. パソコンを使って、ゲームをする。	60.2	80.0	64.0
8. パソコンを使って、文書を作成する。	65.5	97.5	71.6
9. パソコンを使って、グラフ (図表) を作成する。	4.1	53.8	20.3
10. パソコンで作った文書やグラフをフロッピーに保存する。	14.5	85.0	27.9
11. パソコン用のソフトウェア (ワードなど) をインストールする。	8.3	81.3	22.2
12. 周辺機器 (プリンターなど) を追加したり、設定しなおす。	7.7	60.0	17.7
13. パソコンで、年賀状などのハガキやカードを作成する。	12.4	92.5	27.7
14. デジタルカメラなどで撮った写真をパソコンに取り込む。	4.4	52.5	13.6
15. 電子メールの送信と受信をする。	38.1	92.5	48.4
16. 電子メールに文書や写真のファイルを添付して送信する。	4.7	70.0	17.2
17. インターネットを使って、ホームページを見る。	34.5	93.8	45.8
18. インターネットのホームページを自分で作成し、更新する。	3.2	11.3	4.8
19. インターネットの電子掲示板・チャットなどを見る。	3.2	42.5	10.7
20. インターネットの電子掲示板・チャットなどに書き込む。	1.5	23.8	5.7
21. インターネットを通して、映像や音楽などをパソコンに取り込む。	0.6	37.5	7.6
22. インターネット上で、ゲームやオンライン・ショッピングをする。	1.8	32.5	7.6
23. 1. ～ 22. のいずれもできない。	3.8	0.0	3.1

[A] : IT講習会受講者 [B] : シニアネットの会員 [C] : 両者の合計 *いずれも「できる」の比率 (%)

(表1－2－2) パソコン・インターネットの利用能力 (第2回調査)

(%)

パソコン・インターネットの利用能力	[A]	[B]	[C]
1. パソコンの電源を入れて、起動させる。	94.7	98.8	95.6
2. すべての操作を終了し、電源を切る。	90.3	98.8	91.9
3. マウスを使って、正確にクリックできる。	84.7	98.8	87.4
4. ゆっくりならば、キーボードを打てる。	71.7	50.0	67.5
5. キーボードを見ながら、ある程度、速く打てる。	36.0	76.3	43.7
6. キーボードを見ないで、速く打てる。	1.8	16.3	4.5
7. パソコンを使って、ゲームをする。	59.0	80.0	63.0
8. パソコンを使って、文書を作成する。	69.0	96.3	74.2
9. パソコンを使って、グラフ(図表)を作成する。	10.3	62.5	20.3
10. パソコンで作った文書やグラフをフロッピーに保存する。	23.9	87.5	36.0
11. パソコン用のソフトウェア(ワードなど)をインストールする。	18.3	80.0	30.1
12. 周辺機器(プリンターなど)を追加したり、設定しなおす。	21.5	68.8	30.5
13. パソコンで、年賀状などのハガキやカードを作成する。	26.8	91.3	39.1
14. デジタルカメラなどで撮った写真をパソコンに取り込む。	13.0	73.8	24.6
15. 電子メールの送信と受信をする。	44.0	91.3	53.0
16. 電子メールに文書や写真のファイルを添付して送信する。	8.3	75.0	21.0
17. インターネットを使って、ホームページを見る。	44.2	95.0	53.9
18. インターネットのホームページを自分で作成し、更新する。	3.2	11.3	4.8
19. インターネットの電子掲示板・チャットなどを見る。	7.4	51.3	15.8
20. インターネットの電子掲示板・チャットなどに書き込む。	1.5	26.3	6.2
21. インターネットを通して、映像や音楽などをパソコンに取り込む。	2.1	40.0	9.3
22. インターネット上で、ゲームやオンライン・ショッピングをする。	3.8	30.0	8.8
23. 1. ～ 22. のいずれもできない。	2.7	0.0	2.1

[A] : IT講習会受講者 [B] : シニアネットの会員 [C] : 両者の合計 *いずれも「できる」の比率(%)

ードを作成する」、14「デジタルカメラなどで撮った写真をパソコンに取り込む」、17「インターネットを使って、ホームページを見る」の6つが、いずれも10%以上も回答率が高くなっている。これらは、パソコン・インターネットの基本的な利用能力であるので、IT講習会は高齢者のそれに対して一定の効果を果たしたと考えられる。

一方、〔B〕シニアネット会員では、IT講習会の受講者のような大きな変化はみられない。そのなかで、9「パソコンを使って、グラフ（図表）を作成する」が約10%、また14「デジタルカメラなどで撮った写真をパソコンに取り込む」が約20%回答率が高くなっているのが特徴的である。会員は、日常的にパソコン・インターネットを使っているのも、6ヵ月経っても、やはり基本的な利用能力が大きく伸びるということはないようである。

(3) インターネットの利用に関する意識

インターネットの利用に関する意識に関しては、表1—3のように1「インターネットを利用する者と利用しない者との間に情報格差が生じる」、2「インターネットの利用によって、必要な情報がいつでも簡単に手に入る」、3「インターネットを利用できないと、社会全体の動きから取り残される」、4「インターネットの利用で、多くの人と情報の交換ができるようになる」という4つの代表的な意見を挙げ、それに対して被調査者（高齢者）がどのように思うかについて質問した。

表1—3からもわかるように、上記の4つの意見に対して〔A〕IT講習会受講者、〔B〕シニアネット会員のいずれも肯定的な回答が多く、全体的にはほぼ同じような傾向になっている。ただし、1「インターネットを利用する者と利用しない者との間に情報格差が生じる」では、IT講習会受講者の①「そう思う」の比率が、いずれもシニアネット会員に比べてかなり高くなっている。これは、受講者がIT講習会受講後、まもなく質問紙が送付され、回答しているために、その影響が出ているからではないかと考えられる。

3「インターネットを利用できないと、社会全体の動きから取り残される」については、受講者と会員の間で、意見がほぼ2つに割れている。敢えていえば、受講者の方が①「そう思う」の回答率がやや高くなっている。また、4「インターネットの利用で、多くの人と情報の交換ができるようになる」については、受講者、会員ともに約8割以上が①「そう思う」、②「ある程度はそう思う」と回答しており、両者の間に大きな差異はない。

なお、6ヵ月後の第2回調査（パネル調査）の結果は、表1—3の通り、4つのどの項目においても大きな変化はみられない。これは、受講者であれ、会員であれ、インターネットに対する意識はほぼ固定しており、6ヵ月という期間では顕著な変化が起こらないことを示していると考えられる。

(4) ソーシャル・サポートの授受

高齢者のソーシャル・サポートに関しては、すでにいくつかの「尺度」が開発され、数多くの先行調査が実施されているが、われわれの調査研究では、それらの尺度をそのまま援用するのではなく、本研究のテーマとも関連させて、表1—4—1のような簡易な尺度を質問紙調査用にあらたに作成した。

表1—4—1からも分かるように、1「あなたの心配事や悩み事を相談する」と3「他人の心配事や悩み事の相談にのる」、2「パソコンやインターネットの使い方について教え

(表1—3) インターネットの利用に関する意識 (第1回・第2回調査)

1. インターネットを利用する者と利用しない者との間に情報格差が生じる。

	[A]	[B]	[C]
① そう思う	53.7 (51.5)	37.5 (36.7)	50.5 (48.6)
② ある程度はそう思う	38.0 (38.7)	41.3 (51.9)	38.7 (41.3)
③ あまりそう思わない	6.4 (8.8)	17.5 (10.1)	8.6 (9.1)
④ そう思わない	1.8 (0.9)	3.8 (1.3)	2.2 (1.0)

2. インターネットの利用によって、必要な情報がいつでも簡単に手に入る。

	[A]	[B]	[C]
① そう思う	48.0 (38.4)	31.3 (38.8)	44.7 (38.5)
② ある程度はそう思う	41.6 (52.7)	57.5 (57.5)	44.7 (53.7)
③ あまりそう思わない	7.6 (7.6)	10.0 (2.5)	8.1 (6.6)
④ そう思わない	2.7 (1.2)	1.3 (1.3)	2.4 (1.2)

3. インターネットを利用できないと、社会全体の動きから取り残される。

	[A]	[B]	[C]
① そう思う	16.1 (14.3)	6.3 (10.0)	14.1 (13.5)
② ある程度はそう思う	43.3 (40.9)	46.3 (46.3)	43.9 (41.9)
③ あまりそう思わない	29.1 (33.5)	41.3 (35.0)	31.5 (33.8)
④ そう思わない	11.5 (11.3)	6.3 (8.8)	10.5 (10.8)

4. インターネットの利用で、多くの人と情報や意見の交換ができるようになる。

	[A]	[B]	[C]
① そう思う	16.1 (14.3)	6.3 (10.0)	14.1 (13.5)
② ある程度はそう思う	43.3 (40.9)	46.3 (46.3)	43.9 (41.9)
③ あまりそう思わない	29.1 (33.5)	41.3 (35.0)	31.5 (33.8)
④ そう思わない	11.5 (11.3)	6.3 (8.8)	10.5 (10.8)

[A] : IT講習会受講者 [B] : シニアネットの会員 [C] : 両者の合計

*表中の数値は第1回調査の比率(%)、括弧内の数値は第2回調査の比率(%)である。

てもらう」と4「パソコンやインターネットの使い方について教えてあげる」は、ソーシャル・サポートの授受の関係になっている。また5「気軽にしゃべりを楽しむ」は、そうした関係が必ずしも明確になっていない「コンパニオンシップ」(companionship)と呼ばれるものである。

また、今回の質問紙調査では、「この一ヶ月間に、直接会ったり、電話を使ったりして」という文章を質問文に入れて現実のソーシャル・サポート(以下、リアル・サポート)について質問し、また別の(問)では「この一ヶ月間に、電子メールや電子掲示板・メーリングリスト・チャットなどを通して」という文章を質問文に入れて、インターネット上で行われるソーシャル・サポート(以下、ヴァーチャル・サポート)についても質問した。

表1-4-1は、その結果を〔A〕IT講習受講者、〔B〕シニアネット会員で比較して示したものである。

まずリアル・サポートについては、1「あなたの心配事や悩み事を相談する」と3「他人の心配事や悩み事の相談にのる」ではIT講習会受講者、シニアネット会員のいずれも③「時々ある」と④「よくある」の回答率が低くなっている。しかし、2「パソコンやインターネットの使い方について教えてもらう」と4「パソコンやインターネットの使い方について教えてあげる」では、それらに比べると会員の回答率が高くなっている。シニアネットの会員は、約4割が4「パソコンやインターネットの使い方について教えてあげる」と回答しているのである。なお、5「気軽にしゃべりを楽しむ」では、受講者、会員とも、約4割前後の人が③「時々ある」、④「よくある」と回答している。

ヴァーチャル・サポートについては、1「あなたの心配事や悩み事を相談する」と3「他人の心配事や悩み事の相談にのる」では、やはりIT講習会受講者、シニアネット会員のいずれも回答率が低くなっている。しかし、2「パソコンやインターネットの使い方について教えてもらう」と4「パソコンやインターネットの使い方について教えてあげる」では、それらに比べると会員の回答率が高くなっている。特にシニアネットの会員の4「パソコンやインターネットの使い方について教えてあげる」では③「時々ある」、④「よくある」の合計の比率が40%を越え、リアル・サポートのそれよりも高くなっている。また、5「気軽にしゃべりを楽しむ」では、受講者の回答率(③「時々ある」、④「よくある」の合計)こそ、わずか5%程度であるが、会員のそれは25%に達し、約4人に1人がインターネット上で、「気楽にしゃべりを楽しんでいる」ことが分かった。このことから、心配事や悩み事のような深刻な問題については、やはりインターネット上で相談をしたり、相談を受けたりすることはなく、それはリアル・サポートを通して行われていると思われる。

次に、表1-4-2をもとに、第2回調査(パネル調査)の結果をみると、基本的には第1回調査と大きな差は生じていない。ただし、IT講習会受講者のヴァーチャル・サポートに関しては、2「パソコンやインターネットの使い方について教えてもらう」で、②「たまにある」、③「時々ある」、④「よくある」の合計の比率が20%以上も高くなっている、4「パソコンやインターネットの使い方について教えてあげる」で3倍以上の比率(4.0%→13.5%)になっている、5「気軽にしゃべりを楽しむ」で15%以上高くなっているという3つの傾向を析出できる。

なお、シニアネット会員のヴァーチャル・サポートに関しては、4「パソコンやインタ

(表1—4—1) ソーシャル・サポートの授受 (第1回調査)

(%)

(1) あなたの心配事や悩み事を相談する。

	〔A〕		〔B〕		〔C〕	
	<u>Real</u>	<u>Virtual</u>	<u>Real</u>	<u>Virtual</u>	<u>Real</u>	<u>Virtual</u>
① 全くない	66.1	97.3	69.2	91.7	66.8	96.1
② たまにある	26.7	1.4	21.8	8.3	25.8	2.8
③ 時々ある	4.7	0.7	2.6	0.0	4.3	0.6
④ よくある	2.5	0.7	6.4	0.0	3.3	0.6

(2) パソコンやインターネットの使い方について教えてもらう。

	〔A〕		〔B〕		〔C〕	
	<u>Real</u>	<u>Virtual</u>	<u>Real</u>	<u>Virtual</u>	<u>Real</u>	<u>Virtual</u>
① 全くない	50.3	72.4	27.3	41.9	45.8	64.6
② たまにある	33.1	16.6	48.1	36.5	36.1	21.6
③ 時々ある	12.4	6.9	19.5	13.5	13.8	8.6
④ よくある	4.1	4.1	5.2	8.1	4.3	5.2

(3) 他人の心配事や悩み事の相談にのる。

	〔A〕		〔B〕		〔C〕	
	<u>Real</u>	<u>Virtual</u>	<u>Real</u>	<u>Virtual</u>	<u>Real</u>	<u>Virtual</u>
① 全くない	59.8	94.2	46.2	68.5	57.1	88.8
② たまにある	32.0	5.5	42.3	20.5	34.0	8.6
③ 時々ある	6.3	0.4	7.7	9.6	6.6	2.3
④ よくある	1.9	0.0	3.8	1.4	2.3	0.3

(4) パソコンやインターネットの使い方について教えてあげる。

	〔A〕		〔B〕		〔C〕	
	<u>Real</u>	<u>Virtual</u>	<u>Real</u>	<u>Virtual</u>	<u>Real</u>	<u>Virtual</u>
① 全くない	91.5	96.0	13.0	25.0	76.1	81.5
② たまにある	8.2	3.7	45.5	31.6	15.5	9.4
③ 時々ある	0.0	0.3	22.1	17.1	4.3	3.8
④ よくある	0.3	0.0	19.5	26.3	4.1	5.4

(5) 気軽におしゃべりを楽しむ。

	〔A〕		〔B〕		〔C〕	
	<u>Real</u>	<u>Virtual</u>	<u>Real</u>	<u>Virtual</u>	<u>Real</u>	<u>Virtual</u>
① 全くない	40.9	88.6	27.4	39.2	38.3	77.8
② たまにある	19.5	6.1	26.0	35.1	20.7	12.4
③ 時々ある	20.8	3.4	24.7	17.6	21.5	6.5
④ よくある	18.8	1.9	21.9	8.1	19.4	3.3

注) 〔A〕: IT講習会受講者 〔B〕: シニアネットの会員 〔C〕: 両者の合計

(表1—4—2) ソーシャル・サポートの授受 (第2回調査)

(%)

(1) あなたの心配事や悩み事を相談する。

	〔A〕		〔B〕		〔C〕	
	<u>Real</u>	<u>Virtual</u>	<u>Real</u>	<u>Virtual</u>	<u>Real</u>	<u>Virtual</u>
① 全くない	60.4	94.8	55.0	85.3	59.3	92.9
② たまにある	31.7	4.2	40.0	13.3	33.3	6.0
③ 時々ある	6.1	0.7	3.8	0.0	5.6	0.5
④ よくある	1.8	0.3	1.3	1.3	1.7	0.5

(2) パソコンやインターネットの使い方について教えてもらう。

	〔A〕		〔B〕		〔C〕	
	<u>Real</u>	<u>Virtual</u>	<u>Real</u>	<u>Virtual</u>	<u>Real</u>	<u>Virtual</u>
① 全くない	39.4	52.9	19.2	37.2	35.5	49.7
② たまにある	45.0	30.4	57.7	44.9	47.5	33.3
③ 時々ある	10.6	11.5	15.4	14.1	11.5	12.1
④ よくある	5.0	5.1	6.4	3.8	5.3	4.9

(3) 他人の心配事や悩み事の相談にのる。

	〔A〕		〔B〕		〔C〕	
	<u>Real</u>	<u>Virtual</u>	<u>Real</u>	<u>Virtual</u>	<u>Real</u>	<u>Virtual</u>
① 全くない	50.3	87.9	41.6	62.7	48.6	83.0
② たまにある	39.4	9.4	40.3	25.3	39.6	12.6
③ 時々ある	9.0	1.6	10.4	6.7	9.3	2.6
④ よくある	1.3	1.0	6.5	5.3	2.3	1.8

(4) パソコンやインターネットの使い方について教えてあげる。

	〔A〕		〔B〕		〔C〕	
	<u>Real</u>	<u>Virtual</u>	<u>Real</u>	<u>Virtual</u>	<u>Real</u>	<u>Virtual</u>
① 全くない	83.8	86.5	16.5	25.0	70.0	74.4
② たまにある	15.3	11.9	50.6	40.8	22.5	17.6
③ 時々ある	0.3	1.3	17.7	18.4	3.9	4.7
④ よくある	0.6	0.3	12.7	15.8	3.1	3.4

(5) 気軽におしゃべりを楽しむ。

	〔A〕		〔B〕		〔C〕	
	<u>Real</u>	<u>Virtual</u>	<u>Real</u>	<u>Virtual</u>	<u>Real</u>	<u>Virtual</u>
① 全くない	36.9	72.9	22.8	46.1	34.0	67.4
② たまにある	24.5	15.9	21.5	22.4	23.9	17.3
③ 時々ある	18.3	6.4	22.8	21.1	19.2	9.4
④ よくある	18.0	4.7	21.5	10.5	18.7	5.9

注) 〔A〕: IT講習会受講者 〔B〕: シニアネットの会員 〔C〕: 両者の合計

一ネットの使い方について教えてあげる」で③「時々ある」と④「よくある」の合計の比率が10%程度低くなり、逆に5「気軽におしゃべりを楽しむ」ではその比率が5%程度高くなっている。

さて、上述のソーシャル・サポートの授受については、特に一方的な関係はみられない。すなわち、1「相談する」と3「相談にのる」、2「教えてもらう」と4「教えてあげる」の関係において、どちらか一方に回答が大きく偏るという結果にはなっていない。これは、リアル・サポートとヴァーチャル・サポートの両方でほぼ共通している。ただし、IT講習会受講者とシニアネット会員の差は、前者では2「パソコンやインターネットの使い方について教えてもらう」の回答率が相対的に高く、また後者では4「パソコンやインターネットの使い方について教えてあげる」の回答率が同様に高くなっている。なお、5つのサポートのいずれにおいても、リアル・サポートとヴァーチャル・サポートの間にトレードオフの関係、すなわちリアル・サポートが高いとヴァーチャル・サポートが低くなる（あるいはその逆）という相互関係はみられず、両者にほぼパラレルな関係がみられる。

4. 分析と考察

以上の結果をもとに、本論では次の3つの点で分析と考察を行うことにする。

まず第1は、シニアネットの活動が今後、拡大する可能性がある点である。

シニアネットの活動へ参加している高齢者は、基本属性の結果からもあきらかなように必ずしも特殊な人たちではなく、ある意味では都市型高齢者の「典型」であるといえる。つまり、それまでの仕事からは引退しているものの、経済的にはある程度、公的年金などによって余裕があり、心身ともまだ健康で、しかも高学歴であるため、高齢期になっても学ぶことに対して意欲的な人たちである。このような高齢者は、これから「団塊の世代」と呼ばれる人たちが高齢者になると、おそらく少数派ではなくなるであろう。

また、彼らは地域社会（コミュニティ）に対しても、従来までとは異なる考え方をもっている。そのため、シニアネットの活動へも、町内会・自治会、婦人会、老人クラブなどの地縁型組織ではなく、非営利組織（NPO）や社会福祉・ボランティア団体、趣味のサークルなどのように共通した「関心」によって結びつく、新しい地域組織で活動するのと同じ意識・態度で参加してくると考えられる。こうした点を考えると、高度情報社会の実現とともに、地域社会における「起業」としてのシニアネットの活動は、これから一定の拡がりを見せるのではないかと思われる。

第2は、高齢者の「デジタルディバイド」に関する通説の再検討が必要な点である。

ここでいう通説とは「高齢者はパソコン、情報端末（PDA）、携帯電話（iモード）などのニューメディアを使いこなせないため、高度情報化という社会全体の動きから取り残されて、『情報弱者』になる」というものである。

確かに、現在の高齢者全体でいえば、IT講習会参加者の調査結果が示すように、上記の通説を完全に否定することは難しいといえる。しかしながら、表1—2のシニアネット会員の結果は、こうした通説を十分に否定できる可能性をわれわれに示唆している。部分的とはいえ、シニアネット会員のインターネットなどの利用能力は、一般的な若者のそれを越えているのである。また、表1—3が示すように、シニアネット会員だけでなく、IT講

習会受講者も含めて、高齢者の情報社会への意識はいずれも前向きであり、こうした意識は、やがて高齢者に優しいインターフェイスの開発と普及とともに、日本社会のソフト面を大きく変化させていくと思われる。

第3は、情報社会における高齢者のソーシャル・サポートの変容という点である。

これまでの高齢者のソーシャル・サポートに関する研究は、いずれも現実の対人的な関係、すなわち「リアル・サポート」を前提としてすべての理論が構築されていたといえる。しかしながら、われわれの調査研究の結果から、ある程度、インターネットなどを利用している高齢者には、ネットワーク上に「ヴァーチャル・サポート」が存在していることがあきらかになった。その存在自体はまだ萌芽的なものであるが、これからニューメディアを利用する高齢者の数が急速に増加すれば、このサポート・ネットワークは、これまでのソーシャル・サポートを変容させることになると考えられる。

ただし、高齢者の場合、ヴァーチャル・サポートがリアル・サポートを代替する可能性は低いと考えられる。換言すれば、ヴァーチャル・サポートが増大することによって、リアル・サポートが縮小するというトレードオフの関係よりも、むしろヴァーチャル・サポートがリアル・サポートを補完し、促進するというパラレルの関係、つまり「ヴァーチャルとリアルの融合」という関係で、これから2つのサポートが機能していくと思われる。

5. むすびにかえて

本研究では、仙台市で活動を展開する2つのシニアネット（シニアネットクラブとシニアネット仙台）を調査対象としたが、この2つは全国に存在するシニアネットのなかでも、最も組織的かつ積極的に活動している組織であり、その結果をもって理論的に普遍化することは、現時点ではまだ難しいといえる。

しかしながら、本調査研究の結果は、将来の超高齢社会における高齢者像の一側面を示唆している可能性が高いとわれわれは考えている。その意味では、今後は2つのシニアネットがさまざまな活動を展開できている社会的な条件や、シニアネットの活動に参加している高齢者の意識・態度の構造などについても、より一層、研究を深めていくことが必要になる。また、そのためには、他の地域のシニアネットなどの比較研究も必要になると思われる。本研究をひとつのステップとして、今後、さらにそうした点についても研究していきたいと考えている。

<注>

- (1). シニアネットと呼ばれる新しい組織は全国で30以上あるが、それぞれのURLを参照していくと、数名の高齢者が文字通り、ネットワーク上でのみ活動をしているところもあれば、「仙台シニアネットクラブ」や「シニアのための市民ネットワーク仙台」のように、事務局をもち、さまざまな活動を実際に行っているところもあり、その実体はかなり多様である。
- (2). 「仙台シニアネットクラブ」については、<http://www.zundanet.co.jp/seniornetclub/> を参照。
- (3). 「シニアのための市民ネットワーク仙台」については、<http://www.sendai-senior.org/> を

参照。

(4).社会老年学全般の研究動向については、「社会老年学の課題と方法」折茂肇編『新老年学』〔第2版〕東京大学出版会、1999年、1291頁～1314頁に詳しいが、そこでもシニアネットに関する研究は取り上げられていない。また、近年の『老年社会科学』（日本老年社会学会誌）などを見ても、ソーシャル・サポートに関する研究は、いずれも現実（リアル）のものに限定されている。

(5).第1回目の質問紙調査（2001年10月実施）における有効回答数は、シニアネットクラブ86名（85名）、シニアネット仙台35名（23名）、IT講習会受講者580名（564名）であったが、60歳以上の会員・受講者に分析の対象を限定すると括弧内の数になった。また同様に、第2回目の質問紙調査（2002年4月実施）ではシニアネットクラブ67名（66名）、シニアネット仙台21名（14名）、IT講習会受講者348名（339名）であった。今回の分析では、原則として第1回目と第2回目に共通して回答した会員と受講者419名を対象としている。

<参考文献>

浅川達人・古谷野亘・安藤孝敏・ほか(1999)「高齢者の社会関係の構造と量」『老年社会科学』, 21(3), 329-337。

浦 光博(2001)『支えあう人と人』サイエンス社。

奥山正司(1997)「日本における高齢者の家族・親族からのサポート意識；国際比較研究の意義と問題点」『社会情報論叢』, 創刊号, 1-19。

金益基・朴京淑・小島宏(1998)「現代の韓国と日本における老親の地理的ネットワーク」『人口問題研究』, 54(4), 63-84。

金恵京・甲斐一郎・久田 満・ほか(2000)「農村在宅高齢者におけるソーシャル・サポート授受と主観的幸福感」『老年社会科学』, 22(3), 395-404。

古谷野亘・安藤孝敏・浅川達人・ほか(1998)「地域老人の社会関係にみられる階層的補完」『老年社会科学』, 19, 140-150。

坂田周一・Jersey Liang・前田大作(1990)「高齢者における社会支援のストレス・バッファ効果：肯定的側面と否定的側面」『社会老年学』, 31, 80-90。

笹谷春美・岸玲子・江口照子・ほか(1993)「大都市高齢者のソーシャル・ネットワークとソーシャル・サポート」『高齢者問題研究』, 9, 65-78。

野口裕二(1991)「高齢者のソーシャル・サポート；その概念と測定」『社会老年学』, 34, 37-48。

藤崎宏子(1998)『高齢者・家族・社会的ネットワーク』培風館。

Hwang, M. Y. (1999)「都市部における低所得層高齢者のインフォーマル・サポート・ネットワークの機能に関する研究」『韓国老年学』, 19(2), 27-46。

前田尚子(1988)「老年期の友人関係；別居子関係との比較検討」『社会老年学』, 28, 58-70。

前田尚子(1991)「老人のソーシャル・サポート・リソース選択について」『家族関係学』, 10, 23-33。

前田信彦 1995「都市居住高齢者のパーソナル・コミュニティ」『都市問題』86, 9: 41-52。

前田信彦 1998「高齢者の家族とソーシャル・ネットワーク」『家計経済研究』40, 35-43。